

香爐を盗む

室生犀星

青空文庫

男が出かけようとすると、何時いつの間にか女が音もなく玄関に立
つていて、茶色の帽子をさし出した。男はそれを手にとると格子
をあけて出て行った。女はしばらくぼんやり立っていたが、間も
なく長火鉢のところにくったりと坐つて、いつまでも動かないで
いた。それは女のくせで、いつも男が出て行ったあとは考え込ん
で、すっかり陰気になつて、なにも手のつかない一二時間をぼん
やりして送るのが常である。そして考えつかれるとやつと縫物を
はじめなのだ。海苔のような布ぬのきれ片しやくを杓しやくるようにして、暗い糸を
通したりしていた。そういう一時間が経つと、かの女はまた上目うわめ
をしながら神経深くなつて、何かこま纖こまかい感情の上のことや、茶碗

のふちが、少しばかり欠けたことや、男の出掛けぎわに故意と視線を外らしたことや、口へまで出てわざと黙った素振りをしたことなどが、つきからつきと考えられた。その考えにふければふけるほど、しぜん仕事が留守になつてしまつて、あけた障子のそのあかりを茫ぼうぜん然と上目をしながらながめるのであつた。

實際、女は日に日に瘠せおとろえていたのである、あごの尖つたのや、ほっそりと顔全体が毎日匏かんなをかけたように剥そがれてゆくのや、病的に沈みきつて蒼みをもつた皮膚が、きみの悪いほど艶を失つて、喉のあたりまで白く冷たく流れこんでいるのや、それらは永く正視できないほど憂鬱こに凝り上つているものに見えた。一つには彼女が物音を極端におそれたり、一つ事を永く考え込ん

だりする性質からきているのである。たとえば男の室へやに、男のいないときに不思議に起る咳の音や、畳ずれのすることや、何か小言をいうらしいけはいなどが、よく空耳を襲うて彼の女をぎつくりさせるのであった。かの女はそのほっそりした弱弱しい顔をあげ、じつと耳をすまして、男の室におこる物音をしかも男のいない日に殆ど癖ほとんのようになって聞くのであるが、そういうとき彼女は真青になっておのずから顫ふるえるような気がするのであった。

かの女の眼底にはいつも黒ずんだ男の姿が、はつきりと仕事台に向つて終日こつこつと彫りものをしていゝ手つきまでが映つていて、それが異様な単に黒ずんだ影のようになつてみえるときと、その顔まで生白く映つてくるときと、また別な余り見たこととな

い他人のように見えるときとあつた。一つの材料に向つて毎日彫りものをしてゐる鑿のみの刃が、ちらちらと鉋屑のなかに光つたり、たくみに彫つては木屑をすくい出したりしているのが、その黙々とした姿と一しよいっにうつつてくるのである。男はいち日、ものも言わず不機嫌に仕事をし、不機嫌に咳をし、不機嫌に日に三度あて一しよに食事をするのであつたが、何ひとつ愉たのしそうな顔をせず、特に何事かを話し合うということがなかつた。かれは女の蒼白い顔を見ることをおそれるもののように努めて視線を避け、つとめて話をし合わないようになつてゐた。女はそういうとき室にいて時時男の仕事にきき耳を立てることもあつたが、すぐ寂しそうにれいの暗い糸から糸を引いては縫いものをつづけるだけであつ

た。

男は夕がたになると外へでかけた。男にはあきらかに女ができていることも、そとで初めて明るく微笑わらえることをも、女はいつものまにか感じていたけれど、女はしつこく黙つて、いつも、

「いつていらつしやいまし。」

そう言つて茶いろの帽子をわたすだけで特に妬やくような素振りも言葉づかいもしなかつたのである。そのため男は夕方になると妙にもじもじと時計や庭や空をながめたりして落ちつかかなかつたが、しまいには思いきつて立ちあがるので、そのときの苦しそうな淋しい顔立ちのなかにしんと静まりかえつた表情が、いつも女にはすぐ読みとれた。かの女は柔順に男を出してやり、男はおそ

くなるとひどく酔ってかえってくるのである。が、ふしぎなことには、男の目にうつる女のやつれようの烈しさは見るからにいたたく、細れきって精根もないそうめんのように小寂しくなつて見えるのであつた。それゆえ女が玄関に出て夜おそく迎えにでると、男のかおは後悔と羞恥とのいろを瞬間にたたえたが、まもなく氣の強くなつたような顔をして自分の室へはいつたきり出てこないのである。

女は日に日に瘠せるばかりで、どういうときにも音というものを立てなかつた。すうと襖をあけたり、猫のような柔らかい足つきで畳の上を^{すべ}つたり、深く睡りこんでいるように押入と障子との隅にぺたんこに坐り込んで、いつまでも黙っていたり、そうか

と思うと何か洗濯ものをしながら、鹽たらひのそばにかじりついていた
りした。それは水のように音のない、どこか足のない生きものの
ようにも見られた。かの女が男の仕事場の障子をあけて、

「……………」と何かの用事をいうとき、男はおともなく開いた障
子と同じいいろをした女を見ると、わけもなくぎっくりした。障
子に半分以上を隠した顔が半分に切った鶏卵のように、つやを失
つて見えたからである。おどおどしながら、はじめ半分ばかり見
せた顔をだんだんに障子のそとに隠してしまうのであった。

「どうしてお前はおれに恐こわがるんだ。そんなにおどおどしてさ。」
男が鑿ひで荒彫りを一と刃ぎつくりと立てながら、ひよいと顔を
あげて言うと、女はひくい声で、

「いいえ。べつに恐がっているわけじゃありませんの。」

殆ど囁くように言つて、男の顔色がすこしばかり苛立たしくなつて、やさやつているのを読んだが、いつもの不機嫌とは違つた若干かの優しさが含まれているのをすぐに見て取つた。いつもと異つたちが気もちでわたしと優しく何かを話しようとしているのだと、女はすばやく考えた。

「それならそれでいいがお前のように一日考え込んでばかりいるとしまゝには病気になる。いまもからだが悪くようじゃないか。めつきり瘠せてしまつたじゃないか。」

女の肩のさびしい斜線の、すうとうすい鉛筆でひいたように薄く流れているのを、男はその細い腕のあたりまで目にいれて言つ

た。

「自分じや何^なんともおもっていないんですけれど……それに別に何^{どこ}処^わが不良^{わる}いということがないんでございますが……。」

「お前の瘡^{かさ}せかたがあまりひどいんだ。考えない方がいいのだ。」
男^{おとこ}がこう言ったとき「瘡^{かさ}せたことは知^しっているんですが……、

と女^{おんな}はこたえると、袖^{そで}のところを捲^{まく}つて細^こい手をさすつて見^みせた。
肘^{ひじ}から手首^{てしゆ}まで鮎^あのように細^こく、生^{なま}白^{しろ}いむずむずした臆^{おそ}病^{びょう}そうな
艶^あを失^うつた褪^あせたいろで伸^のべられた。葉^は脈^{みやく}のよう^{よう}なうすあおいも
の^のがすいて見^みえた。

「お前は取^と越^こし苦^く勞^{らう}ばかりを^をしているんだ。つまらないことは一^{いっ}
切^{せつ}考^{こう}えない方が^がいいんだ。」

男が煙草を喫いながら言うと、女は何か言おうとしながら口を噤つぶんだ。表情はすぐ瞼まぶたの顫えたのをきつかけに、一層いつそうの冷たさつぐと蒼白さを加えた。それは何時も彼女が何も彼も押し黙かっているときに不意にあらわす表情で、男はこれを見るとその執拗さと混乱された心をすぐ読みわけた。それほど男にとって永い間女と一しよにいただけ、すぐに感じられる表情であつたのである。

「……………」女は黙つて、目をあげて男をながめた。男はその目のいろを見ると、そこから奥深い、女がもつ特有な炎をかんじた。怨うらみぶかい変にからみついて取れないしつこさをもつた目であつた。

「もう少し仕事をしよう。あっちへ行つていてくれ。」

男はこんどは女の方を向かないで、鑿のさきでコツコツと細部の彫りものにかかりはじめ、再度にどと女のほうを向かなかつた。女はその俯向きになつて仕事をはじめた男をみると、二分ばかりもじもじと何か男の氣に入るようなことを言おうと、心のうちでさがしたが浮ばなかつた。女は音のしないように障子をひいた。白々と閉しまつた。男はそのときやつと安心したように目をやると、また仕事台にむかつた。

女は自分の室にかえると、ぺつとりと糊のように坐つて、手を膝の上においてぼんやり何か考えこんだ。

日が昏れかけると男はさらりとした着換えをすましたころ、勝手で茶碗や皿類を洗っていた女の手がびりびりと震えたかと思うと、その手がきゆうに止ってしまったとき、女の眼が大きな水甕めの胴体に吸いつけられた。あめいろをした甕の地に疣あざのような焼きの斑点しみが、幾十となくあつた。それを数えつくしたときに、内部に残ったうなぎの肌のようにぬらぬらした生きものの、長くとぐろを巻いた水が森しんとして目にうつってきたのである。かの女はさかんに燃えるような一つの火になったかと思うほど、眇いすかになるほど、強烈な凝視をつづけたのであつた。そのとき彼女の視界に何がうつったのか、いそいで休めた手を前垂れでくるくると拭いてしまうと、ほそい襷たすきを片はずしに桶の輪のように脱とつて手拭

かけにだらりとかけた。そしてすぐ茶の間へ出て、鏡をちよいと覗いた。夕あかりを胎はらんだ鏡は深くひかったが、何処か白紙のよ
うに寂しくみえた。

かの女は玄関へ出て、れいの茶色の帽子をとって細っそりと立ちあがった、そのとき、男は自分の室からぶらりと玄関へ出てきて、女を見るとびっくりして顔いろを変えた。ふしぎにどういう時にでも、外出するときになると、どういう忙しい仕事をしていても女はいつも先廻りをして玄関へ出て待っているのが常であった。それが食後なれば外出することを感じやすいのは誰でもあるが、食事前にでも女はいつもれいの茶いろの帽子をもつて、音のない水のように立っているのである。それゆえ男は暗いいろをし

た襖をうしろにして今の今、こうして女が立っているのを見ると、ぎつくりと胸にこたえた。あれほど静かに着換えをしていたのに、もう感じ出したのかと、そつとひと目くれると、女はしめった声で、

「いっていらつしやいまし。」

そう言つて茶いろの帽子をさし出した。ほそい蚕そらまめ豆のような指さきが、柔らかい帽子のふちにあたまをそろえているを見ながら、男は帽子をうけとると黙つて習慣的に下駄をひっかけて、自分でもびっくりするほど強く格子を開けると、四角な箱のような玄関から、するりと脱けて出てゆくのであつた。女はすこし上目をしながら見送ると、そつと障子をしめてしまつて、長火鉢のと

こへ又ぺつとりと坐りこむのであった。

水気ぐんだ暗みが夕明りの隅々に這はいかけても、かの女は坐つたまま、永い間一とところを凝視しつづけたのである。片手だけ畳の上にちからなく垂れ、片手をひぎの上におきながら、烈しい一点にあつまつた目をめがけて、眉や鼻や唇や、やせた頬の肉が一時に集中されたように、顔じゆうが尖るほど、女の眼は凝りあがつてみえた。そのとき女は前に置かれた新聞紙を一いっしん心になつてみつめていたが、ちよつとの間その表情が動いたかと思うと、ますます烈しい凝視をつづけた。蒼白い顔面はまるで一とすじの布きれのようになつて、その新聞紙の上にそそがれたが、間もなく女はそつとその新聞紙をひいたとき、そのしたから胡麻粒のよ

うな一面の赤蟻が、殆ど見わけることのできないほどの微かすかな、いくすじとない行列を畳のへりから障子ぎわの闕しきいまでつづけていた。女はそれを見ると、ぬれた雑ぞうきん巾でいちいち拭きとつてしまふと、また坐つて毎夜のように壁や障子を見つめたのである。ふしぎに女が永い間壁や障子を見つめているうち、あたまがはつきりしてきて、いつも影のようなものを障子や壁のそとに映してくるのがつねであつた。それが次第にくせのようになって男が留守にさえなれば、壁のうしろに（実際はそこは隣とのさかい目であるが。）もう一つ室があつて、そこには電燈があかるく吊されてあり、白白した光を放っているまで瞭然と目にうつつてくるのであつた。その室の特長として映るものは自分の家とは全まるでかけ

放はなれた明るさを持ち、新しさをもち、その上掛軸や活いけばな花が整然
 として飾られているように思われた。何よりもはつきりと目に見
 えるのは男の姿で、その男がずっと以前に女にして見せた同じ
 微笑と、同じい胡坐あぐらをかいていることと、同じい声音とであつた。
 おなじい微笑をしながら何か話しては、興おもしろ味そうに、時には喜
 ばしそうにからだを動かしたりするのが、その手つきにまであら
 われてみえた。

男の姿がそれほど明瞭にうつってくるのにひきかえ、女のほう
 は影のようにぼんやりして、いくら能よく見ようとして眼をすえて
 も、だんだん小さくちぢんで遠くなつてゆくような気がした。し
 かしその不判断なむしろ朦朧もうろうとした顔つきにも、にんがりと踏

みつぶしたような妖艶な微笑がうかんで、ことに黒ずんだ分厚な唇はまるで一疋のいもりのように跳ね返って、はげしい肉情のまどになって見えてくるのであった。その唇を見つめては、酔ったようなふらふらした目をした男が、手を伸ばしては女の手をとろうとしたり、唇に唇を合せようとしたりする苛々しい二つの影が壁を透したふしぎな室のなかに、ずるずると畳擦れの音とともに女の視覚と神経とをすつかり支配しつくしたとき、まるで女はきちんと正しく坐って、気でも狂れたように棒みたいに硬ばっていた。蒼白い皮膚はますます烈しい生白さと、異常な精神の緊張とを完全なまでに覆うて、一面に微かな顫えを烈しくあらわしていた。ことにいまは眇いすかになったような斜視がたえまなく白い糸の

ようなものを壁のそとにそそいでいるようであった。壁のそと側のあやしい人物は幻燈のようにくるくるうごいて、あやうく女と男とが一つのかたまりになりかかったり、いきなり真赤ないもりのように泳いだりする微笑された口もとが、かつとほのぐらい四^あ辺^たりに彫られたりした。男はまさしく餓えたように女のそばに喰^くつき廻^つつていて、物憂い昼間の仕事台に向つていたときの男とは別人のような元氣と精力をもっているようにおもわれた。

「わたしが毎晩こうしてあのひとのことを考えているうちに、だんだん瘖せほそつてゆくのだ。わたしはあのひとが毎晩出て行つてからのことをすつかり永い間見ている。あのひとはそれを知らない。わたしは見まいとしながらも引き摺^ずられるように毎日あの

ひとのことを考えなければならぬのだ。」女はそう思いながら、ふと一時に気のぬけたように踵かかとと踵との間におしりをおとした。ぐったりと生白い泡のようにしぼんだかと思うと、悪夢から醒めたように目をきよろきよろとさせた。そのときの疲労しつくした眼の下には黒ずんだ輪さえうかんで、じとじとしたあぶらが、額のうえに浮きでていた。

女は恐ろしいものから遁のがれたように、「ああ。」と言つて溜息をついたが、息がはずんでいるために肩さきが震えて見えた。女はしばらくすると勝手へ出て行つたが、すぐ、生水を呷あおっているらしい喉鳴のどなりがごつつりと、幾たびもつづいた。女はもとのところに坐ると、目のさきにふらふらと動くものを感じて仕方がなか

った。目のせいかと平手で目をこすったりしたが、しかし動くものは絶え間なくその動きをつづけていて止まなかった。はつと気がついたとき柱時計がそこにかかっているのを見た。何心なくであつたが、

「時計がうごいていたのだ。」そう言つて女はうつすりした微笑をうかべた。笑っているのかいないのか判らないほどの、きわめて変な微笑であつた。間もなくも一度時計を見るとこんどは気味悪く声にまで出して微笑つたとき、女は自分で自分の微笑い声にびつくりしてあたりを見まわした。そのとき九時を三十分過ぎた針がおたまじやくしのようにちよろちよろ泳いでいるように見え

た。

十時がすぎ、十一時がすぎ、最終列車の汽笛がいつものようにしたときまで、女はやっぱり坐つたまま眠るでもなく醒めるでもない、うつらうつらした籠に揺られるような気でゆらゆらしていた。が間もなく何時ものようにその時刻から尻のほうから逆に上つてくるような水のようなものをかんじ、はつきりと目薬をさしたように瞳が冴え返つてくることをかんじるのであつた。何が故であるか、その晩い時刻は先のかの女をおそうた幻影の内にもう一度かの女を引き摺り込むのであつた。かの女は搾木しめぎにかけられたように硬ばつて、頻りにその聴覚をかたむけはじめた。そのとき何処か道路のようなどころで登音あしおと音がした。いそいで来るらしい木魚もくぎよのような遠い音が、明るい電燈の点ついている広いところ

から、鉤形にまがって急にほの暗い通りに歩き近づいてくるような気がしてきた。

かの女はそのとき目を閉じて耳だけを澄ましていたのである。奇妙な下駄の音はすこしずつはつきりしてきて、坂のようなところを上ってきた。ふた側の新しい家並みも寝しずまっています、男の黒ずんだ姿だけが闇のなかに、もつと暗い影をひいていた。

「あそこの角は果物屋になって居り、となりが床屋になっている。床屋だけが寝しずまった通りに明るい電燈を道路に投げている。そこへ暗い影が浮き出た。男がいまそこを通ったのである。それから溝川どぶがわのごぼごぼいう重い音がして、男がそこをそつと通ると、暗い小路をまがった。漆のような闇がつづいた五軒目の、ぼ

んやり点ともれた電燈にまざまざと格子戸がはまっている。……。」
と考え沈んだとき、がったりと音がした。女がびっくりして目を
あけた。格子戸があいて男がかえってきたのである。

女はすつと立つて玄関へでた。

「おかえりなさいまし。」

茶いろの帽子はまた女の手にもどつたが、それはすぐ帽子掛に
かけられた。男は酔った声で低く遠慮しているような声でささや
いた。

「誰もこなかったかね。郵便も。」

「いえ。どなたもお見えになりませんでした。」

女はそう言つて、ちらりと男の顔をみると先刻の男と異つてい

るところがなかった。いもりのような唇をしている女が、玄関の内側に佇たたずんでいるような気がして暗い男のうしろをながめた。軒燈をうしろにした格子が寒々と荒い棧型にはめられていた。

「そうか。さびしかったかな。おそいから寝たらいいだろう。」

男はそういいながら女の顔をみると、夕方出て行つたときから、また一と皮だけやつれてみえた。顔いろが日に日にわるくなつてゆくのも目についた。

「お床をとりましたよ。」

女はそう言いながら床をとつてしまうと、男はぐったりと疲れたからだを横にした。ほんとに気味の悪い女だ。なにも彼も見えていたように変ななおをしている。そう思つて細目に眼をあけてみ

ると、女は鬩のところにと手について、

「おやすみなさいまし。」

男の顔をまじまじと見たが、すつと音のしないように立って自分の室へ行った。変な女だ。猫のように音をたてない。上目してじつと見つめられると、何も彼も写真に撮ったように知った顔をするのだ。男はそう思っているうちにうとうととした。

女は着物をきかえながらほっそりした胸を鏡にうつして、女自身もふしぎに瘖せほそつたからだをつくづく眺めこんだ。ちいさい乳房や鳩胸のさびしい高まり、それに喉ぐちがほっそりと上へ向けて伸べられていた。喉のうえにはれいの蒼白い首があった。女は全身のなまなましいからだから放つ紙のような白さを、夜更よふけ

の冴えた電燈にさらしながら、ながい間見つめているうちに、

ふふ……と微笑ほほえんで見た。また、こんどはきつとした真面目な

緊張した表情をして、目をいからして見た。かと思うと、またきゆうにうつとりと媚びたような艶めいた目つきをしたが、それらをいきなり取り崩すように又微笑ってみせた。白い歯があらわれた。寒かった。

男の室から小さいいびきが起りはじめた。うさぎのように耳をつつ立てた女が、それをきくと見る間に憂鬱な曇った眉と目とのあいだから、さめざめと泣き出した。一時にためた様々な悲しそうな長い忍び泣きがつづいた。それはふしぎに笛のような声にも似ていたし、鼻でくんくん啼く犬のこえにも何処か似ていた。

男はある日仕事場の鉋屑をまぜ返したり、道具箱をがちやがちや鳴らしたりして、しきりに何か捜しているようであった。雨は飴いろにそとの空気をそめた陰気な午後であった。

女がひよこり仕事場に顔を出すと、男はあわてた恰好でたずねた。

「鑿が見えない。鑿が……。」

鉋屑を搔き廻しながら言った。

「そう。箱のなかにないでしようか。」と女は道具箱を覗き込んだが、そこにもなかつたのだ。

「いや箱にはないのだ。ふしぎだ。実にふしぎだ。現に今使っていたんだが。」

男はそう言つてぼんやり女のかおを見た。女はそのとき鋭くあたりに目をくばつて、そこらの棚や仕上物や材木のあたりを凝視みつめ出した。そのとき不思議に女の眼がだんだん眇いすかになり出してきたのである。いつもするような烈しい斜視が、めらめらと燃えつくように鉋屑のあたりを這い廻つた。

男は何気なくふと女の眼を見ると、すぐ驚いた。それはあまりに劇はげしい凝視と、気でも狂れたひとのような怪しい光とをもつていたからである。そのとき、女は立つて鉋屑をつめこんだ俵のなかを指さした。

「あのなかに這入はいつていないでしょうか。わたしにはそう思えるんでございますが……。」

「俵のなかにかね。」

「ええ。」

「まさか——こうつと、さつき鉋屑をつめこんで……と……何か堅いものが手にあたらなかつたかしら……。」

男は考えこんでしばらくすると、びっくりしてすぐ俵のそばへ寄つた。

「あ。たしかに木屑と一しよにつめ込んだのだ。」

そう言つて男は鉋屑をつかみ出した。と、一挺ちようの白い刃のついた鑿が木屑と一しよにまぎれ込んでいるのを発見みつけたのであつた。「危ないところだつた。それにしても能く怪我をしなかつたものだ。」

男は刃わたりを手のひらで查しらべたときに、漸やつと女が俵のなかにあることを言ったことを考え、ぎっくりして顔いろまで、変えて女を見つめた。しかし女は平気になっていたが、つかれたらしい蒼白い揉みくちやにした紙のようになって、うっすりと優しく微笑んでさえいたのである。その落着きを見たとき、男は脇の下のさむくなるのを感じた。

「しかしお前にはどうして鑿が俵のなかにあることがわかったのだ。」

こう言われると女は微笑って言った。

「でもあそこより外ほかにあるとは考えられないんですもの。」

「それもそうだが……。」

男はそれきり黙って気味悪く女をみつめた。そのとき男はいつもの女とは異つたものを見たような気がした。何かわからなかつたが男にないものを女がそのからだに含んでいるように思つたのであつた。何かこう特別な電気とか燐りんとかいうものが、その肉体にふくまれているようにさえ、一種言いがたい変な気がしてきたのであつた。

女はそつと次の室に行つたあとで、男はいろいろなことを考えた。女がたえまなく沈んで何かをしつこく考え耽ふけつていたりことや、ふしぎに退屈もしないで一と処に何もしないで坐つていたりすることなど、いまは次第に男の心を変にうち沈ませた。

日が暮れた。男は女が庭へ出ている間に手早く仕事着をぬぎす

てると、そと着をひっかけた。そして急いで玄関へ出たとき、男はびっくりして一尺ばかり飛び上った。そこに何時の間に鯢かぎつけてきたのか、れいの鼠の皮のような茶いろの帽子をもつて、女がほそながく立っていたからであつた。

「いまお前は庭に出ていたようであつたが、それとも家にいたのか。」

男は帽子をとると、こう言つて女のかおをながめた。

「でもおでかけのようでございましたから……。」

女は答えると玄関の障子をそつとあけて、

「いっていらつしやいます。」

手をついて言つた。指のないまるような円い手が畳のうえにおかれ

た。

「うむ……。」

男は下駄をひっかけてそとへ出た。夕明りがまだ漂うている中空に、くらい蝙蝠こうもりが暗やみを縫いながら低く地べたをすれすれに馳はしったりしていた。

「どうもあの女には別な気もちがあるらしい。しよつちゆう考え込んで何かを搜さがりあてようとしているのだ。」男はそう思いながら何時もの溝川の橋までくると、きゆうに立ち停った。溝から泡がぶつくりと浮きあがつて、魚の臓腑のように破れているのを眺めていたが、男はそのとき橋をわたらないで、自分の家へ向つてあと戻りしたのであった。

家では男が出ていったあとで、女は又ぺったりと坐つて、うつらうつらと何か考えていたようだったが、いきなり襟えりくび首を持つて引き据えられたように顔をあげた。真白になっていた。耳はその輪廓を幾重とない渦巻きをあらわして、ぴいんとつつ立つた。

「はてな。」

女はちいさい声でつぶやいたとき、外では男が湿った板戸にぴつたりと平蜘蛛のように忍びよったところであつた。星ぞらではあつたが、もう完全な暗がそこらじゅうを染めあげ、あるものはだらりと暗く地上を這うていた。

「とすると……あの方は橋のあたりから引きかえしてきて、勝手に板戸のところにいるのにちがいない。」

女はそう心でつぶやいたとき、はつきりとうす暗く忍んでいる男の姿が、よこ板を使った勝手の板戸に平たく、黒い斑点のようになっていてのを考えついた。そしてぶるぶると蜻蛉とんぼのように震えた。見つめていっているうちに黒い大きなひらめのような影が、一枚の障子にうつりきれないで、もう一枚の方にまでその影を伸ばしながらうつってきたのである。妙にざらざらと障子紙が擦れて鳴るような気がした。

時計はそのあいだに十分二十分を過ぎた。間もなく三十分を過ぎた。夜はしずかに小雨あがりの湿っぽい土になく虫の音のほか、何事をも起りそうもない沈んだ静かさのうちに、闇はしだいに熟うれてゆくようであった。——女は烈しい緊張のために呼吸を飲み

込んではいたが、それがまた喘ぐあえような苦しい調子になって、がくがくと空気を吸おうとしながら、からだがり引きしめられているように自由にならなかつた。足や手や顔やがしんじばりをしたように張りつまつた。ことに胸が板のように硬ばつてきて、からだを動かすちからが抜けたようになってしまつていた。

そとの姿はやはり板戸にくつついて、それが二枚の障子に写しかえられて女の眼にますます濃い姿をうつさせた。女のかおは糊のように乾いてただそれは一枚の紙きれにすぎない死んだような白さであつた。呼吸はますます苦しそうに見えた。れいの斜視は最初の十分からもう一時間以上を經ていた。

と、そとの影が板戸をすうつと引つぺかしたように離れたその

とき障子のかげもずるずると動いた。女の斜視は乙形にひらめいたとき、

「ひとあし一歩、ふたあし二歩、みあし三歩……。」

と、女はひくい声で心臓のはげしい鼓動と一しよの息ぎれでかぞえはじめた。柔らかい土には音がなかったが、女が五歩まで数えたとき障子のかげはすっかりなくなつて、いきなり玄関の格子ががらがらと雷のような音をたてて男がはいつてきた。が、その格子の音がするほんの二秒ほど前に女は恐ろしい驚くべき緊張と凝視との世界から切りはなたれて、ほそ腰から二つに折れたように気を失つて前へつつ伏ふしたのであつた。骨まで折れたようにつくりして――

間もなく女は床についた。その目はいつも光線のある方を向かないで壁や障子のあるところ、隅々のくらみをもったところに注がれていたのである。彼女は乾した鱈いわしのようにほそれきつて、すこしばかりの粥と青白い乳や、たまには果物などをたべた。ただその瞳が異様に廓かくだい大されていて、光は床につかない前よりも鋭くなり増まさつていたのである。

ものうく自分の指紋をしらべたり、ほそい腕をさらさらと臆病そうに撫でさすつて見たりするほか、うとうとと少しばかりの嗜し眠みんのあいだをさまようたり、またぼつかり目をさましたりしていた。そうかと思うと彼女はいつも、殆ど絶え間もなく同じい数を算かぞえたりしていたのである。

「一二三四五……。」

それが何の理由もなく繰り返かえされ通されたのである。医者は脳神経衰弱であるといい、殆ど精神病者に近い憂鬱症に陥つているといふことを男に注意した。

男はその仕事のひまひまには女の室へ行つて、

「なにかほしいものがないか。」

よく尋ねたが、女はあたまを振つて、

「いいえ。何なにもほしくはありません。」

そう答えるだけで目を閉じるのであつた。かれはその蒼白くやせ込んだ額や首すじをみたりすると、いつかの晩の気絶したときの女の変にゆがんで、死人のようにくたくたに柔らかくなつた身

体をすぐおもしろい出した。それは手も首もはなればなれにぐなぐなになっていたからである。首を起すと、だらだらと流れるように肩のつけ根から下がった腕と、俯向けになつた手首が畳の上に擦れて、げじげじ虫でも這うような厭な搔くような音をたてたからであつた。

「わたし今どういう風にねていたんですか、言つてください。」
こう女が言つて、うつすりと目をあげたとき、男は気味悪いほど女が何故気絶したかを次第にわかるような気がしたのであつた。
「俯向けに——こういう風に。」

男は自分で腰を折つて、つつ伏した姿をしてみせたとき、女は嬉しそうな表情になつて、

「まあ……。」

と言つて男のかおをちらと見て微笑んだ。それがまた男にはわざとされたような気で、きゆうに黙りこんでしまったのである。

男は仕事場にかえつて、こつこつと彫りものをはじめた。そうしているうちに、かれはそつと障子をあけて次の室の病人がどういう風に寝ているかということが気になつて、四ツ這いになつて、つぎの障子戸までしずかに忍びよつたのである。

男は障子のすき間から覗いたとき、起き上つた女が真青になつて、男の忍びよつたことを疾はやくに感知し待ちうけているような声で言つた。

「なにか御用でございますの。」

その声は落ちついていった。男は吃驚^{びっくり}して冷たくなって、からだを縮めながらそれには答えないで黙っていた。

「そんなことをなすつても、ちゃんとわかりますの。」

言われたとき、男はおもいきって障子をさらりとあけた。女は微笑んでみせた。つめたい亀のように瘠せた皺が額のところに寄った。

「どうしてお前におれの姿がみえるのだ。気味の悪い——。」

男は棒立ちになつて、なまじろい女のはだけた胸をみつめながら言つたとき、

「あなたこそ気味の悪い、四ツ這いになつて忍びよるなんて。」

そう女がこたえると、男は又冷たくなって急に言葉もでなかつ

た。ただ不思議なものをみるように、この変な女をつくづく眺めた。いまは彼女はただ気持ばかりで生きているほど細ながく伸ばされたようになっていたのである。横になればなつたままで、のろのろと這い出し兼ねないぬらぬらと細く、きみわるい蒼白さに澄んでいたからである。

「ほんとにどうしてお前はおれが忍んできたことがわかるのだ。」
女はぐんにやりと微笑って、

「どうしてって……どうしても見えるんですもの。」

男は青くなって、やはり立ったまま女の耳をふいと目に入れた。それは薄手な白い菌きのこのようなかたちをしていて、ときどきぴりぴり地震えるように動いた。「人間の耳のうごくのというものは何

て変なあやしい気をおこさせるものだろう、あれの耳の動くのを今日はじめて知ったのだ。これまで自分の知らなかったときにも動いていたのだ。」男はそうおもいながら尋ねた。

「眼を閉^{つぶ}つて考えあてるのか。それとも眼をあけて考えるのか。」男は自分の質問の変なことを心でそれとかんじながらいうと、

「どちらでもないの……。」

「どちらでもないのか……。」

男はそう答えて黙ってひきかえそうとした。女はそのとき又床のなかへからだを入れようとした。わき腹のほねが規則正しく波をうって、むしろざらざらした感じで目に映ったので、男はこりこりなあばらの骨を手で撫でたような悪寒をかんじた。

「そこを閉めていってください。」

女はそういうとぬつと、生白い首を布団から迂り出した。男はわけなくぞつとして障子を閉めた。閉めたあとまでさきの姿が目
にのこつていて離れなかった。

男はそとへ出ていても、すぐ女の青白い顔がうつり出してきて
落ちつかなかつた。電車に乗っていてもふいと乗り合せの女のか
おを目にいれると、ふしぎに家にいる女のかおが掠^{かす}めてしまうの
である。暗い室がみえる。壁と障子の方をむいて、わざと向かさ
れたようになって、まじまじと何か考えながらいる横がおが見え

てきてならない。きつと又出かけてきた道順や町などを考えこんで、「いまごろはあの町角をまがって、ごちやごちやな通りへ出て、石でも投げあげたように電車に乗ったにちがいない。そしてあの人はガマ口を出して切符を買って……それから……」と男はいつも女のする想像を考えあてると、すぐそばに女が坐っているように、あたりをきよきよ見廻したりした。

男は電車を下りると、いつも行きつけたひっそりした家へはいった。そこは街裏の何処か艶めいたすだれや肘かけや細ほっそりした煙草盆だのが置かれてある室であった。つめたい紫檀したんのちやぶだいい、襖のかけから見える長いよく磨かれた廊下などがみえた。

「しばらくいらつしやいませんでしたね。おかけしましょうか。」

女中がそう言うのと、男は疲れたようなこえで、

「あ、それから急いで酒をもつてきて呉れ。」

男がこう命じると、すぐ女中が去つてしまつて、いつものようにぼんやりと一人ひろい座敷におかれた。雨のない重いような曇つたそとの空気は、ひっそりと家内をはずまらしていた。間もなく電話の鈴が鳴つた。女にかけているらしいのである。

男はたばこをふかしながら、いつになく家をでるとき「早くおかえりなさいまし。」と女が言ったことをおもい出した。病氣になつてから久しぶりに出かけようとしたとき、れの蒼白い首を床から乗り出して女がそう言ったのだ。ぎらぎらした鱗のような目と、やせて尖つた小鼻とがまた目にうつり出してきた。

「いけない、妙に気がかりになっていけない。」

男はたばこをやめて、また、退屈な五六分をおくると、そこへ静かに目ざめるような派手な扮装をした女が膝をついた。男はすぐさま明るい顔になった。

「お久しぶりなのね。」とすこし膝を乗り出した。いそいで来たものらしく、おしろいの刷毛はけがよくとどかない地だけが茶がちな顔のいろを出して、そこだけ妙に禿げたようにつるつるしていた。「妙に黙り込んでいらつしやるわね。どうかして——。」

「いや、別に何も考えていないのだ。重くらしい厭な日だな。」
「きようは変なことばかりあったのよ。お湯屋の時計が停つていたし、うちのも三時で止つていたし、それに本統ほんとうに妙よ。あた

しのものも止っていたの。」

男はこう聞くと機械的に、

「ふむ——。」と帯のあいだをさぐって、迂り出した時計を出して眺めた。小さな音をきざんでいたの、ほっとしたように女は明るくなって、

「まあ嬉しい。あなたのも止っていたらあたしどうしようかと思っていたの。あたし妙に神経質で、かつぎ屋なの。」

男はふいと欄間のところをみると、そこに小さな襖戸が開けられてあつて、何か影のようなものをちらと見たような気がしてしかたがなかった。特に何者であるということが判然はつきりしないが、変な気がしてあたりをぐるぐる見廻した。なまこ色の壁と、障子

と、床の間の小さな香爐こうろとが目にはいった。

「変だわね。あなたは……さつきから話の腰ばかり折って落ちつかないのね。」

女はあちこち見廻す男の目を追ってこう言うと、

「そうかな。何んだか落ちつかないんだ。変に静かなせいもある。」

男はそういうと、女はすぐ、

「どんなお客でもみんな考え込んで、へんに沈み込んでいるのね。しよっちゆう何か心のうちで搜っているようなところがあるわ。何を考えているんでしょう。」

「家のあるものは家のことを考えているんだろう。」男は横にな

った長いものや、障子と壁の方にむいた蒼白い顔を目にふいと入れると、もしかすると今夜あたりわるくなつてはいはないか。あれが死ぬようなことがあれば、あれが死ぬようなことはないが、しかし悪くなるとすると……考えこむと、女はにつこりして、「おくさんのある方はやっぱりおくさんの事を考え出すんでしようね。」

まじめな声で言った。

「まあそうだね。」

男は一向酒がきかなかつた。しかたなしに男は床の間の香爐の蓋ふたをあけようとすると、女はすぐ袖をとらえた。

「いけないわ。また、あんなものを見ちやいけないわ。」

男は氣のくさくさするときには香爐の蓋をながめる癖があつた。

蓋のうらには精細な、美しい男と女とが温あたたかに抱き合っている赤絵がえがかれてあつて、ふしぎに男はそれをみているうち、からだに別なちからと精力が湧き出すのがつねであつた。鬱々したときはいつもその白い二足のむつれあつた魚のようにぬらぬらしたものに、永い間ひとみをさらすのであつた。

「氣がくさくさするんだ。見たつてかまうものか。」

男は蓋をとりあげると、まじまじと眺めた。これを見ていると、くだらないことを忘れてしまえるからいいのだ。かれはそれを横にしたり透かしたりしていると、

「おかしいわ。そんなに見ちや、は、は、は。」

女は微笑つて引つたくろうとした。と、かつきり描かれたようなもりのような腹赤な唇が、男の目にいきいきとうつつてきたのである。男はぐなぐな手をとろうとする。そのとき、ぴつしりと打叩うちたたかれた。いつもそんなことをしない女なんだが。

「莫迦ばか。何をするんだ。」男は叩かれた手をさすりながらいうと、
「何んにもしなくてよ。誰か叩いたようだったわね。」

「誰かが叩いたようだとは——。」

「あたしじゃないわ。こつちの手に煙草をもっているでしょう。だから叩くことができないわ。おかしいわね。は、は、は。」

男は女の左の手をみると、指とおなじい長さとお白さをもった紙巻が挟まれて、しずかに煙をあげていた。

「嘘を吐け。」男はそう言つて、わけのわからない激怒をかんじて、手をあげて女を打とうとした。ぐらぐらした苛立つた癩かんしゃが額に筋を立てた。

「は、は、は、だ。」

女は不貞ふてくされて高い声で笑いぬいたとき男はびつしりと張りつけた。と、蒼くさつと洗つたように蒼くなつた女はびつくりして暫しばらくものをいわなかつた。が、また変に笑い出した。酔うとそういう癖のある女は、ただ可笑おかしがつた。

「ああ……。」そうだ聞える。いやな。男はがつくりと首を床の上から畳に擦れ落ちたような音を耳にした。もしものことがあるとやはり可哀想だ。今夜あたりは危ないのだ。家においてやればよ

かつたと、男は考え出したときは、もう酔よが足もとをふらふらさせた。いつでも不平がましいことを言つたことがない。濟まないと思いながら、こつそりと家を逃げ出してきたのだ。

「どうしたの。苦しいの。」

「莫迦をいえ。酒をもつと持つてきてくれ。あつくして。」

女が梯子はしご段だんを下りて行つたあとで、しばらく男はひとりでい

た。ひとりでいると障子が余りに白く鮮やかで、なにかが映つてくるようなあやしい予期をさせた。壁にしろ、無意味に広い座敷にしろ、どうもいけない。男は敷島の袋を手にとつたときも、がさがさした落葉のような音がしたので、ふしぎそうに眺め出した。「と、何かこう変化かわつた事が起きて居はしないか。それとも毎時いつも

のように壁の方を向いて寝ているだろうか、どうしてあれは壁の方ばかり向いて睡るくせがついているのだろうか。いつころだろう、あんな変な風な女になったのは……。」「

そのとき階下へおりた女が、長い廊下をしずかに歩いてくる足音がした。そして室へはいると、

「まあ恐い——。」と言つて顔いろを変えた。慄おびえたように眉をそよがせているのだ。

「どうして怖いのだ。」

「どうしても恐かった。でも目ばかりくりくりさせているんですもの、きようはどうかしていらつしやいますわ。」

「いつもと異つているかな。」

「ほんとに変よ。手に何をもつていらつしやるの。」

「何つて……何をさ……。」

気がつくともまだ男は香爐の蓋をしつかりと握っていた。握っていた手が殆ど無感覚になるほど、永くつかんでいた。

「いやなひと。まだあんな物をつかんでいるんだもの。」

女は言つて又引き奪^とろうとしたが、男はなかなか離さなかつた。「すっかり忘れていたのだ。渡してたまるものか。」

男はそう言つて頑固に堅く握っていた。むずむずと這い出るよ
うな二足の生きものの絵を、あたまに柔らかく痒^{かゆ}いような心持で
えがきながら。

「じゃ、いつまでも持つていらつしやい。は、は。」

女は仕方なしにこう言つて、また酒をつぎ出した。男はいつか女に尋ねて見ようと思つていて、つい言い出せなかつた喉のころの傷のことをたずねた。それは変に栗いろの二分ほどの、長さの気味の悪い傷であつた。いろいろな想像を加えれば加えられる傷でもあつた。

「何んでもないのよ。おできを切つたあとが残つたの。」

女は言つて人さし指で、その傷の上をなでてみた。柔らかい生白い、たえずろくろのように廻つていゝような首すじ、その喉笛のしたにぽつちりついた傷が男には忌わしい妄念をか驅らせたのであつた。

「おできなのか。おれはまた心中でも仕損しそこなつたのかと思つたの

だ。」

「そうなら気がきいているんだけれど……。」

男は言つてきゆうに黙り込んだ。「何かがあつたのだ。おれが
氣のつく程度で何事かがあつたのだ。あの傷はただの傷ではない。
決してただの傷ではない。」男はそう考え出した。女も黙り込ん
だ。男はすぐまた家にいる女の生白い首すじ、ねじ切れそうな白
葱のような首すじを考えた。ほんとに何も起つていてくれなけれ
ばいいが、男は苦しそうに心でむしろそれを「何も起る筈がない
のだ。ああして壁の方を向いてやすやすと睡っているにちがいな
いのだ、」と考へて。ほつとして杯を口にした。

「何事が起り得る筈があるものか。生むは案じるより安しだ。本^ほ

統んとうに何も起つてはいなからう……が併しかし、あれは又毎時の壁を見詰めて、こうして此処ここに坐つてこの女と話していることをすっかり考えあてたとすると、若もしくは考えあてようと、ぎらぎらと例の斜視をやっているとすると、彼女あれは最もつと悪く最もつと細く、極端にヒステリックになつてはいはしないだろうか。」

男は鑿のことや、玄関の隣の間から誰すい何されたことを思い出して「あるいは意外に、真統ほんとうに意外に此処のすつかりを考えてあてているかも知らない。此処にいるおれのすつかりをだ。」男はこう思つたとき、ぎつくりした。吸殻がちやぶだいの上に、白くざらざらにくずれた。

「あたし今夜はこれで帰らしてほしいわ。よそから口がかかつて

いるんですし……。」

女は恐そうに男の眼が異様に輝くのを眺めながら、おどおどと言つて、男が承諾するかどうかを目敏めざとく読んだ。

「帰るか。ふむ。くちがかかっているんならいいよ。止めないから。」

男は反対に怒りが沈みきつて、森とした頭になつた。

「わるく思わないでくださいな。」

女はわざと男のかおを覗き込むように、猫のような狎なれた一瞬間の微笑をうかべると、すぐに座敷からでて行つた。あし音が長い廊下から消えた。「また一人になつてしまったのだ。何も別にあの女でなければならぬことはないのだ。ふむ。」と反感的に

考え込むと何故かふらふらと酔が一時に嘔き出るようにやってきた。

金を払うと、のっそりと池の端のまわりを歩き出した。

「ともかく帰ろう。何にも起ってないことはちゃんと信じているのだ。きつとだ。」男は執拗しつこく繰り返しくちのうちで言つて、瓦斯ガス燈の青い光をびっしりと浴びながら、二た足ふばかりあるいたとき、何んだかばつさりと衝つきあつた。

酔っていたせいで、すこし眼が眩くらんだ。あしもとを見ると藁屑わらくずがそこら一面にみだれていた。乾いたいやな匂いでさらさらと鳴っていた。

男が電車に乗ったころ、女は蒼白い蛙のようになって、床から半身を乗り出し、極度の疲労と凝視との世界から赦しやほう放されたばかりの荒い肩息を吐いていた。不思議に女はすっかりを眺めていたというより、殆どの確な想像で男の逐一な行為を感知してしまつたのであつた。女は女自身にあつても之等これらの凝視の世界が、果してどれだけまでが想像であるか、幻覚であるか、または一種の透視的な夢幻界を彷彿ほうぼう徨したものであるかという區別を判明はつきりすることができなかつた。かれはいつもその男の姿が街へ浮び出し、街の混こんど鬧のなかに紛れない色別をその姿に見出すとき、はつきりとその歩行や動作や、または女の家に入ることや、その室

内に於けるあらゆる細部の動作までを、漏なく、平常の男の生活や動作や言葉の内に感じ出して、ありありと描き出すことに馴れていたのであつた。

女はそのとき、男が今何処の通りを歩いているかという自分との隔離を、その次第に近づいて来る隔離を殆ど透明なものを視るように、的確に感じ出していた。いろいろな商店や通行人や電燈や縁日商人などのなかを、一歩ずつ黒ずんだ姿を運んでくるのが、その町の家並がだんだん背後に遠く挟せまつてゆくのと一しよに写し出していた。女の見た男は非常に疲れていたし又甚はなはだしい苛苛した表情で、何か荐しきりに考え詰めているような鬱陶しい歩みをつづけていたのである。女はそれを以て明らかに自分の上にかかわって

いること、自分以外にかれの意識が働いていないことを確かめることができたとき、女が能くやる隠れた微笑みをうつすりと浮ばしたのであった。

男が土橋をわたりかけると、その樽の上でも叩くような蹠音が女の耳そこにきこえたとき、かの女はすっぽりと毛布をかむつて、やすやすと睡つた風をした。表があいた、くらい土間から上つてくると、すぐ障子をすらりとあけた。そして、

「べつに変化りはないか。睡っているのか知ら^し。」彼は語尾をひとり言のよう^に言つて、女のあおい顔を見た。うつすりと目をあけた女は、だるい声で、

「おかえりなさいまし。たいへん晩うございましたのね。」

女はこれだけ言って、いつもより親しそうな微笑をうかべた。

「何事もなかったのだ。もしかすると非常な不吉なことが、起つていはしないかと思つていたのだ。」男は安心したような顔で、「うむ。すこし手間のとれることがあつて晩くなつた。変化がなくて何よりいい塩梅だ。」

真面目に落ちついてこう言うと、女はくつすりと微笑つて、すぐ元のまじめな顔になり澄ました。へんな奴だ。ああいう微笑いがおをこのごろになつて時時するのだ。そんなときおれの方で何時も何か言いあてられたような気がするのだ。男は黙つて自分の室へもどろうとすると、女は、

「あの……すこし……。」

と言ひ吃^{ども}つて、男の左の袂^{たもと}をじろりと眺めた。男は機械的に左の袂に手をやると、何か堅い陶器のような物がはいつているのに気がついた。「まさか酔つていても彼^{あんな}麼ものを入れて帰る筈がない。筈がないが……併し別に外の物が這入っている筈もないのだ。」そう男が思いついたとき、突然、ほとんど唐突に思いついたのが香爐の蓋であつた。まさかあんなものを……と思つたが、顔はすぐ熱く火のように赤らんで了^{しま}つた。

「見せてくださいましな。」

女がこう言つて、ぐんにやりと伸ばされたように微笑つたとき、ぎつくりして男は機械的に袂から香爐の蓋をとり出した。出したとき男は羞恥も顧慮も無い、平明な、むしろ嫌^{けんえん}厭するよな顔

をして、

「見たつてしようがないじゃないか。下くだらない。」

そう言い棄てると、女はいきなり長い蛇のような白い手をぬらぬらと這わせるように、布団のあいだから引きずり出した。そしてその香爐の蓋を手にとると、これも又突然に殆ど奇声ともいふべき高い猿のような叫びごえを立てた。が直ぐどうなるかと思うくらい病的にわなわなと震え出した。つぎの瞬間には崩れるようにげらげら笑い出して、

「あ、おかしい。あ、可笑しい。」

と、そこらじゆうを転がりはじめた。白い馬鈴薯のような細いからだきちがが、氣狂いのように筋ばって這ってあるいたのであった。

「馬鹿。」

男はこう怒鳴ると、ころがつていたからだが、坂の下にでも行きついたらようにぴったりと停った。それと同時にこんどはゆるゆると顔を擡げはじめた。その顔は汗と熱とに湿って真青であった。いちめんにくらぐらと煮え立ったようなところもあつた。眼と眉と鼻とが呼吸をそろえて喧嘩でもしているように、各各別々な形と光と憤怒とに揉みあげられ、男のかおを目がけて烈しい速力で寧ろ叩きつけられたのであつた。

そうかと思うと訳のわからない囁言のような調子で叫び出して、其処らじゆう搔き掴むようながりがりした音を立てた。男の動悸は極度の不安と激しい乱打とに湧き立った。

「ひよつとすると気がふれたかも知れない。あの眼はただごとではないぞ。ひよつとするとだ。だが既^もう疾^{とつ}くに狂れてしまった後の瞬間かも知れないのだ。」そう思って、

「落ちついたらいいぜ。なんだそのだらしない恰好は……じつと落ちついて……じつと動かないでいるんだ。」

なだめるように慌てて低いこえで言うと、女はさつと目も鼻も一時に死んだような静けさに返ったが、また、ぐらぐらとその澄んだ静かな表情をいきなり叩きこわしてしまつて、目は火のような炎を吐きながら正面に男にすえ込んだ。「も一度言つてごらんなさい。何ですて。しかし一体これは何です。何んです。ああ、これは何んです。」

と又びつたりと香爐の蓋を手にとつて今にもそれに噛み附くように、ぎりぎりと恐ろしい齒がみを仕だした。男はそれを見ているうちにすっかり頭に不思議な恐怖と超自然的な威嚇いかくとが乗りうつつて、ひとりでに胸が鳴り出し、軽い眩惑さえかんじ出した。

「これが一体何んです。」

こうまた新しく叫び出してむつくりと起きあがつて、その生白い首を据えたかとおもうと、いきなり壁のところところに香爐の蓋をちから一杯に叩きつけた。古い陶器は白い肌をあらわして微塵に碎け散った。

「やったな。……。」

男がおもわずこう叫び返したとき女は何やら昂奮以上の昂奮で

又叫び出したが、間もなくげらげら笑い出して、

「ああ、おかしい。おかしい。」

そう言つて又転がり始めた。が、そのときその転がり方は弱弱しく力なく、間もなく車の輪のやすむようにばったり停つたかと思つと、

「ああ……。」

と欠伸あくびのような気のぬけた声を立てて、ばったりと平つたくつツ伏してしまった。蒼白い顔がぐんにやりと潰れたように古い畳に滅めり込んで、瞳がどんよりと開けられたきり動かなかつた。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 室生犀星集 童子」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年9月10日第1刷発行

底本の親本：「室生犀星全集 第2巻」新潮社

1965（昭和40）年4月15日

初出：「中央公論」

1920（大正9）年9月号

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2014年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

香爐を盗む

室生犀星

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>